

もうひとつの日本代表

いとう あきひで
伊藤 彰英

●日本基幹産業労働組合連合会 事務局次長

第24回夏季デフリンピックが、2022年5月1日、ブラジル最南端のカシアス・ド・スルという都市で、半年遅れで開幕した。デフリンピックとは、聴覚障がい者自身が運営する、聴覚障がい者のためのオリンピックであり、パラリンピックよりも歴史ははるかに長い。しかし、日本ではその知名度は圧倒的に低く、2021年調査ではパラリンピックの認知度が100%近いのに対し、デフリンピックは16%であるという。

このデフリンピックに、デフサッカー女子日本代表が2大会・9年ぶりの出場を果たした。私の娘はトレーナーとして帯同し、選手のコンディショニング面や手話によるコミュニケーションで寄り添った。実は、デフサッカー女子日本代表の派遣が決まったのは、今年の3月のことである。デフリンピック組織はパラリンピックと違って資金難であり、選手は渡航費用の一部として1人60万円程度を自ら負担する必要がある。もちろんトレーナーとて同様である。また、選手たちは大会出場のため2週間以上仕事を休むことになり、その間の給与が出ないケースもある。親に頼る選手もいれば、お金の工面に友人のもとへと走り回る選手もいる。同じ日の丸をつける日本代表選手なのに、オリ・パラの代表とこれほど格差がある現状を見て心が痛む。娘に頼まれて、選手の遠征費の足しにと協会へ幾許かの寄付をしたが、焼け石に水である。負担金を準備できずに、渡航を断念せざるを得ない選手もいた。

これが昨年パラリンピックを開催した国における、障がい者スポーツをめぐる現実である。胸に日の丸をつけて地球の裏側のブラジルで戦う15歳の高校1年生をはじめ、10代~20代の若

者にとって、60万円という大金の負担がどれほどの重みがあるのか、容易に想像がつく。

肝心の試合はといえば、勝ったり負けたりであったが、断トツの優勝候補であるアメリカをあわやのところまで追い込むなど、日本代表は過去最高のパフォーマンスを見せた。オリンピックと違ってテレビ放送はないが、中1日の過酷な日程で行われる試合を、私は眠い目をこすりながらYouTubeライブで観戦した。

そして、デフリンピックの日程も終盤に差し掛かり、いよいよ開催国ブラジルとの銅メダルマッチを目前にした5月11日、日本および他国から多数の新型コロナウイルス感染者が発生し、日本選手団は以降のすべての競技の出場辞退を発表した。多くの選手は、デフリンピックをそれまでお世話になった人に自分のパフォーマンスを示す場所、恩返しの場所と考えている。選手たちの感情に思いを馳せると、私は居ても立っても居られず、ブラジルに遠征中の娘に「無念」とだけメールを送った。すると娘からは「そんなことは誰よりもわかってる。でも私たちがどれだけの覚悟をもって決断したのかを想像してほしい」とたしなめられてしまった。命の安全を最優先に考え、断腸の思いで出場辞退を決断したのである。

メディアにはほとんど出ないが、現在、デフリンピック2025の日本での初開催に向けた招致活動が行われている。願わくは、出場断念で悔しい思いをした選手、資金的な面から参加が叶わなかった選手達にパフォーマンスの機会を与えてあげてほしい。彼等もまた、同じ「私たちの日本代表」のはずである。